

中国ハルピン市における朝鮮語の

アクセントと疑問文のイントネーション

呂 海玉

要旨

(1)中国黒龍江省ハルピン市における朝鮮語のアクセントは、調査した範囲では一型・無アクセントである。単語を単独で発音した場合の音調は、宇都木(2004)が報告するソウル方言のものに似ているが、相違点もあった。

1音節語と2音節語において、濃音・激音始まりの場合は、ソウル方言と同じく、ピークの位置が前の方に現れる。しかし、母音始まりの場合、ソウルと異なり、ハルピン方言では濃音・激音始まりと同様に、ピークの位置は前のほうに現れる。

3音節語の場合、ソウル方言と下降の位置が同じである。

4音節語では、ソウル方言の場合、第2音節にピークを迎えた後、語末に向かって下降するのに対し、ハルピン方言は第2音節よりもむしろ第3音節の後で下降することが多い。

1音節から5音節全体について、終わりから2音節目が存在する場合、下降はその後に見える場合が多い。

(2)疑問文のイントネーションについては、「何が残る？／何が残りますか？／何か残る？／何か残りますか？」を意味する朝鮮語の文を調査した。

(2-1)ピークの数と位置・相対的な高さの順序について。普通体についてみると、WH疑問文とYN疑問文の普通体の場合、2回ピークを迎えているものが多い。また、そのピークの位置は主語の部分と疑問の終結語尾（終助詞）に現れている。これについては統一されていると考えられる。そのピークの高さの順序は統一されていないが、YN疑問文の方が、WH疑問文よりも、終助詞の部分が主語より高くピークを迎えている場合が多い。述語部分はピークがない場合が多い。特に普通体にはほとんどない。

次に、WH疑問文とYN疑問文の丁寧体についてみると、YN疑問文のほうがWH疑問文より3回ピークを迎えた数が多い。恐らく、後ろの方にフォーカスを置いているからだと思われる。

(2-2)文末の上昇／下降について。WH疑問文とYN疑問文には両方とも文末で上昇する場合と下降する場合がある。但し、普通体については、WH疑問文とYN疑問文ともに文末が上昇する場合が多い。